

「こんにちは 健保組合です！」

「共栄運輸(株)の巻」

事業所訪問第九弾、平成五年度最初の本企画の取材に足を運んだのは、木更津市の共栄運輸株式会社でした。桜前線の到来も待ち遠しい今日このごろ、私たちは雲の合間から射す陽光に春の気配をわずかながら感じ、三月十一日、この取材のために港町木更津に向かいました。

国道を南へと進み目的地に向かう

▼斉藤専務(右)と軽米次長



途中、私たちは公道を職場とする仲間の多さに今更ながら驚くのでした。というのも、道路には前も後ろもトラックが連なっていました。この渋滞の中黙々と業務を遂行されている皆さん方に、「ご苦労様」と声をかけたくるのでした。
(話は少々横道にそれたようですが)車は木更津の市内に入り木更津港の付近になると潮の香りが微かに感じられ、さらに車を進めると今日の目的地である共栄運輸株式会社に到着しました。

緑に囲まれた 近代的な事務所

これからまだまだ整備が進むであろう潮浜地区に一段と際立つ社屋、それが昭和六十三年に新しく建設された共栄運輸株式会社の本社でありました。

広い敷地内に前面がガラス張りの二階建ての社屋は、その周りが緑に

囲まれ、まさに近代的な事務所というイメージです。

二階の事務室のドアを開け「こんにちは健保組合です！」と挨拶すると、ミーティング中だった組合会議員をされている軽米次長が「ようこそ！」と声をかけてくださり、女性職員を介して社長室に案内してくださいました。企業の顔である受付を担当される職員の教育にも傾注されておられることがうかがえるほど丁寧な対応に感心する私たちでした。
(後でわかった事ですが、同社には、『社訓』『社是』『綱領』『社員行動基準』『〇カ条』という社員たるもの常に目標とするものが掲げられているのだそうです。)

軽米次長が入室され、しばし雑談の後、斉藤専務がご多忙の時間を割いて取材に同席してくださいました。次長から専務を紹介されると、氏から「あいにく社長は所用で外出しており取材に同席できず申し訳ない」とおわびの言葉をいただきました。同社の社長は、ご存じのとおり果敢の場で活躍されております。私たちもお忙しい御身と割り切って今日に臨んだのですが、お会いできず残念でした。しかしながら、これから本

▼緑に囲まれた本社屋



題に入った後に拝聴できた斉藤専務の新鮮な考え方をお聞きできて、収穫は大だったことはいまでもありません。

高齢化社会の進展に 対応するには

話題は、雑談という形から入り、事務局から組合の現状などについて報告していくうちに、一つ一つをかみしめるように静聴されていた専務の口から年金問題について堰を切ったように氏の考え方が繰り広げられました。「高齢化社会の進展の中で年金受給者層を支える原資がいずれ底をつき、それを支える生産者層の負担が増大するといわれて久しい今般だが、出生率の低下にともない公共

施設(学校等)に支出する額も年々減少し、また、教育費も減少する、人口の減少によって公共事業への投資は今までの様な大幅な伸びはしなくなる、こういった部門へあてていた財源を確保できる。さらには、自活できる高齢者が増加し、高齢化社会に対応できる自己防衛の方法を身につけてくる。これらを公的年金の支給対象から外していくことによって受給者を減らしていくことができる事などからそれほど将来を悲観してばかりいる事はない。」というお考えだそうです。私たちは、この話をお聞きして一種のカルチャーショックをうけた様な感じがありました。今までにない(というより私たちが考えもしなかった)独創的な発想に後で「二理あるな」と一考させられる内容だったと思いました。

その後、医療保険についてやその他さまざまな事にまで言及された言葉の端々に、軽米次長が「唯我独尊」と斉藤専務を評していらつしやいました。が、いい意味で確固とした経営者としての姿勢を貫いている氏に私たちは迫力さえ感じさせられるものがありました。

まだまだ、話題は尽きませんでし

たが、最後に斉藤専務に「何か健康に関して留意されている事は」と尋ねると、「何もしていない」と言い切られました。が、実は、人間ドックの記録を十数年分金庫に保管されているとの事。やはり、社会や家族に対する責任を全うするためには健康である事が必要である事を認識されているのだと感じました。

こうして、短い時間ではありましたが、今まで会った事のない様なタイプの方と対談ができた事に私たちは満足して取材を終えました。

斉藤専務は、「自分に厳しく、他人に厳しく」とお見受けしましたが、共栄運輸の従業員が方向を見失うことなく歩んでいくため、厳しい指南役をあえて引き受けておられる。その裏の素顔にはきつと優しさが隠れているのだろうと感じ、同時に同社の益々の発展を確信しました。

私たちは、取材にご協力頂いた諸氏にお礼を述べて共栄運輸を後にしました。ありがとうございました。

空も抜ける様なスカイブルーに変わり爽やかな風が頬を打ちます。子どもたちの夢中でアサリを掘った覚えのある木更津の浅瀬を横目に見ながら私たちは帰路につきました。